三はユールが前記一に續いて示してゐる、ドニーパー河附近の地方から發見せられた金黨汗アブヅラの銀牌で、これが發見せられた一八四八年に逸早くバンザロフ（Banzalov）氏がその刻文を解說した。全體の形は一と同樣であるけれども、文字は畏吾兒字（ウィグル）を用ゐてあり、且つ牌面の上部に當つて、中央に紋樣化した獸頭、その兩側にまた紋樣化した鳥を刻出し、地質は一と同じく銀である（口繪第三圖）。箭內博士は元朝牌符考の中でこれを虎頭金牌の項下に收め、「虎頭の繪が著しく紋樣化せられたり」とのみ述べたけれども、これが果して虎頭であるか、或は波斯の史乘及びマルコ・ポロ[4]の記してゐる獅子の頭を刻出したものではあるまいかといふことは、その出土地との關係からしても、なほ一考して見なければならぬことであらう。果して虎頭であるとしても、その地質が銀であることはユールの記して居る如くであるから、直ちにこれを虎頭金牌と見ることは出來ない。虎牌にも金以外別に銀を以て作つたもの、卽ち虎頭銀牌と稱すべきものもあつたことを認めなければならぬであらう。

バッヂ（Budge）氏がその著 The Monks of Kûblâi Khan, p. 75 に述べて居るところによると、氏はこの牌の模樣を鷹の一種 Gerfalcon（Schonḳâr）と見たやうで、波斯の伊兒汗 Kaikhâtô が Mar Yahbh-Allâhâ に與へた "Sunḳôr" 級の金牌といふものについて、

"Sunḳôr" といふ語は gerfalcon（shonḳâr）の義である、Sunḳor Paizâ は金牌で、その牌面に通例の刻文の外、gerfalcon の形が刻せられて居る。

とし、圖版 XIII を見よと記した。圖版 XIII といふのは卽ち前記ユールの示したドニーパー河附近から出た銀牌の圖版を引用したものに外ならぬのである。氏が此の如くこれを Gerfalcon（Shonḳâr）牌、卽ち後に說かうとす